武蔵

三芳野名勝圖會

地

内閣文庫

和書	三六四二八	三	一七四函
類	號	冊	九架

118
閲

内閣文庫

番號	和	36428
冊數	3	(2)
函號	174	74

国立公文書館
National Archives of Japan

武蔵三芳野名勝圖會

地

内閣文庫

124
116

国立公文書館
National Archives of Japan

武藏 三芳埜名勝圖會 中之卷

櫻齊中嶌孝昌 輯著

河越市之事

毎月九亦 二六九之日也

河越の市ハ元亀天正之比よりありて市を九ゝいる宮ゝなるハ
正保慶安之比と云ひ伝ふ本町北町高澤町南町江戸町なと
順番に連雀之名せハ昔名加茂下ゝ割渡見を貸も加茂ゝ氏に納む

本町 昔ハ宿と云ひ〳〵 御入國以来月を重ね日を追て
御城下繁花に隨ひ川しゝ本町と唱へ来る也

札之辻 御高札有ゝ偖る御判塚ゝる立て本町高澤町
南町北町之四街之巷よりて此所河越之中央ゝ
結ゝ四方へゝ行程之見ゝて斗る江都と日本橋の如し

蓮師堂之旧地 本町中程南側ゝ[illegible]比ゝ多賀町へ

引き寄せ給ひ多賀町常蓮寺に条下と云ふ

稲荷祠　南側にて裏宿分突当りに厨子と裏に有今模本に

抱屋敷と昔は此所分多賀町書所と所に行て北町分

同心町迄直道あり

加茂下氏　當町にて陌長にて彩代番に付き古来は改め迄の

大節にて番に付き貢米に改め後に貢物に付今清嶋分

古記郷保は年貢米請取に改役加茂下氏集に書し

請取書所持に百姓に付き云

粤文寛文十二年十月十五日　河越御城中におゐて連歌

の御会あり　御供有

夢想に連歌

玉の緒にうつるみの御法連縄　伊豆守源朝臣

月も矢に川神　塩地　朝　吉改

松梅のもとに　栄て来待宇　小嬢

こゝろまの色に　材料　甚三郎

箕山の岳は　静なる　朝朗　以来

顔に　日出　総豊

晴ぬれは　五出　百　舎　吉井

出るは　旅の　あひ　貞次

りふは　都の　迄　忠義

それを　還に　秋を　銅ふ　執筆

下略

伊豆守信綱侯に病孫信輝侯に夢想に師匠白井

信輝侯は別に宗見と號し　寛治三条御城主

あり元禄七年古河へ移封しの
吉政ハ加茂下氏（今ハ加茂下氏ト曰家ト）小姫ハ吉政ノ妻ハ孫ハ吉政
女也玄番ハ井上氏ニシテ今南街ニ子孫与豊家ノ者有
甚三郎紀臺ハ姓氏ハ詳自次忠義ハ伊豆侯近所ト云

榎本氏

本國ハ紀伊ノ人字井鈴木榎本ト称無野
三黨ノ内ニテ天文年中河越ニ来住シテ今十余代
ハ及テ家古ニシテ代々彌左衛門ハ天海僧正ニ中ヨク
深ク帰依シ寛永年中弥左衛門家作ヲ建テ
大工謬テ桁ノ丈ケヲ積リ切リタリ
彌左衛門殊ニ外聞ヲ恥ル早速南光坊ニ参リ
之ヲ訴ルニ大海ニ曰ク一時ノ目出度
ヲ以テ桁ヲ伸テ立ツヘシ家ヲ多ク建テ福吉繁昌
ス大ニ喜ビ悉ク柱ヲ絶テ建リ今モ
其家作ノ侭ナリ火災ヲ免ル誠ニ博識廣徳ノ当意即妙
信仰ヘシ貴重シ（榎本ニ天海僧正ノ申棟札有ト云説ハ此説ヲ取違ヘタルカ）亦此榎本氏昔ハ
善光寺如来開帳ニ有近来寛保元年ニ有
俗家ニテ開帳ヲ例ハ榎本氏計リ也

改一名唐人小路（大道寺駿河守ニ古キ觸状ニ唐人小路ト有唐人小路ト云由縁ハ今大道寺ニ觸状ハ江戸町次京氏所持セリ）

昔世廣ニテ大科ニ過シ家紀ハ所加改ト云ヒ説アリ
疑クハ蔭丁ノ御蔭ハノ貢米ヲ改ル所故ニ初ク改ト云ナリ
柳深度ニ時町ニ寺院ヲ田島村田ヘ移シ改ニ町家并江戸町ニ
東側ヲ少殘外ヘ移サルヘキヨシ有ルヨリ如ク定リシノ
宝永二酉年甲府ヘ移封ニ付其ヲ止ニタリト云
裏宿昔ハ本町ヲ本宿ト称ス裏宿ノ名アリ

鏡稲荷　小夜姫稲荷共云　裏宿東側中程に有

諸人志願を為て成就に後院を拵ける故鏡の稲荷と云

又新田義貞妻小夜姫の墳墓を築き稲荷の祠を

建ると云説あれども年暦不詳　旧記亡失なし疑くハ

扇谷六世に当る姫君の古墳なれ　祠の傍に老樹の榎有

大きを半を隠れ枝葉繁茂して漫々たる三百

坪に及ぶ世伝是を化粧榎と云宝暦年中嵐の為に

枯倒れ此木を繁殖へ以下枯り是ハ此辺栄林寺領

旧地なるよ依て也

古塚稲荷　昔進藤四郎と云人の屋敷ハ有り里儀の居宅ハ

より勧請す今裏宿伊賀屋敷ありやハ知

大河内氏第墳　裏宿西側　小さ百代官町小町に隣る

大河内氏　大河内金兵衛殿ハ松平伊豆守信綱侯に實父也　天正慶長に比河越近郷に御旗本に其家有今大河内氏ハ御

是より記ス

宮ノ下　総る氷川に接る南ハ元會所し木戸西ハ代官町に

木戸際也に名宮ノ下るて御武家町也

徂徠寓居に蹟　宮ノ下江戸町小突当り通て屋敷に云

柳原廣に御時徂徠先生江都より来りて暫く止宿に

藏町　昔坎爾小御蔵ノ所し加く形く云

簾屋敷　蔵町南側に云へ共其所を詳ス寛永十八

年森本勘左衛門と云者能り守る所也

御樹木屋舗　数株に菓樹を植置せ給ふ所也

天正年中酒井河内侯三州龍海院を此地に移る

慶長十三戊申年　上臥廐橋へ移封之時於海院寺
安楽院へ移さる其後御金井酒井備後侯御城主之
御時書洞宗南陽山源昌寺を爰へ移さる御息濱
岐侯寛永十一甲戌年若狭小濱へ移封之時源昌寺
八紺屋村へ引けり紺屋村八元のとく濱岐侯領知たふ
よ依るなり源昌寺ハ本寺と紫林寺へ年其後御樹
木し源昌寺ハ碧地を府川村ふおのゝ七反歩龍寺并
松郷と移京まし七反歩合壱町六反地を紫林寺へ移す
九馬場　昔八馬場なり　秋元侯之御時八泰安寺と云寺有
代官町　天正慶長之比御代官大河内氏之門前なり有
其比酒井侯之石垣御城主と以へき河越屋敷村
公領と貢米を御殿今の役所なり御代官とかゝる所

御鷹匠其外軽き地方市役人方此屋敷住居之者多し云
鍋屋筋　代官町今廣小路之西也石ヶ村矢澤氏之先祖豆州郡
川口村より来て此所より住居後此所御用地と有聖田
ふく碧地を作其形を今渦新田と云其後石ヶ村へ移る
喜多町　札之辻ヶ北方加ふ北町と云昔八東明寺門前町と云
東明寺之惣門之西八ツ橋多町門屋敷跡と名とあり云
橋多町と下町の名残なり東明寺ハ橋を東明寺と云
青鷹山慈願院廣濟寺　曹洞宗　本寺多摩郡根岸村天寧寺末
開山　廣庵芸長大和尚　天正元癸酉年六月六日寂
開闢ハ天文十七年戊申八月廿日大道寺駿河守大檀越と
なりて建立之云
江月静清大居士　大道寺之法号ハ天正十八年庚寅卒
上州松枝神陀寺之廟有　上戸之墓有

本尊　座像ニ釋迦　獅子、文殊　普賢

脇檀　達摩　大權　永平道元佛法禪師　弁天安置

本堂（元葺九間ニ八間）享保年中火災ニ後黙元和尚ニ建所の堂也

此堂普請ありしに時黙元和尚軒の高き八尺面腐朽

ニ為よりて柱弐尺を切るべしと云へども大工切ざり

し和尚自ら鋸を採て一の柱を切はなされしもの

悪ニ依て遂ニ破損遂の為大ならず　昔大内

裡造営ニ時朱雀の南羅生門を建し時　帝叡覧

あり此門額を書し後必ず破損あるべしと

と勅宣ありしを大工切ざりしニて其事を切り落ぬ

破損ありしを見て光和尚の慮を感有哉

禪堂　阿彌陀観音勢至　千躰地藏等安置

廣濟寺　勅住　永平玄透書

舞寇世ニ人ニ子ニ漢渕ニ獅子吼

本堂ニ額　同勝

永爾時山祝清師光源寺　厳南

禪堂ニ額　宋　徑山無準書　禪堂ニ幹

惣門額

選佛場

居宮鑑居嫌鍊魔佛

玉地生涯厳護人ニ卓宗書

高雪山　永平玄透

撞樓　洪鐘一口明和元甲申年古鐘を鑄改て為る所也

鐘銘曰　永福面山禪師撰　孤峯和尚代

古謂。耳聞。不似心聞好。可惜詩。打為兩橛。夫心外無耳。耳外無心。豈旁心耳而已哉。眼處為鼻處佛事。舌處為意處佛事。六根互用。諸塵同參。是名圓通。佛子誰不參熟哉。武州河越青鷹山廣濟禪寺。現住孤峯力生。丁明和甲申秋新鑄大鐘。巽簴樓上乃欲豁開圓通門扇。令法界君生入妙音三昧之弘誓也可最隨喜。頃。託豐後曇亮。見乞其銘。為銘云

武之山田。青鷹山邊。巨鐘新鑄。樓上高懸。茲託法族。乞銘老禪。紹隆三寶。大事因緣。揚一杵响。回十界眠。說却前旨入句中玄。廣濟功德杳絶言詮。普門三昧圓通通圓

永福開山面山和尚ハ諱ハ瑞方字ハ面山　若州ミ人父ハ今村氏入道玄祐　本ハ豐後大友源親世ミ高母ハ牛嶌氏女天和三癸亥仲冬五日生　五歳ヨリ〳〵佛を念し八歳ヨリて普門品を讀十歳ヨリて書籍を暗誦し十四歳ヨリて能く詩文章をなす十六歳ミ時自ら髮を剃て出家す肥後龍本て流長院ミ遠和尚ミ門ふとなる明和六年八十七歳ヨリて遷化生前ミ廣德參てミ雖し編書數百卷近世ミ智識廣密ミ碩德洞濟ミ宗匠也

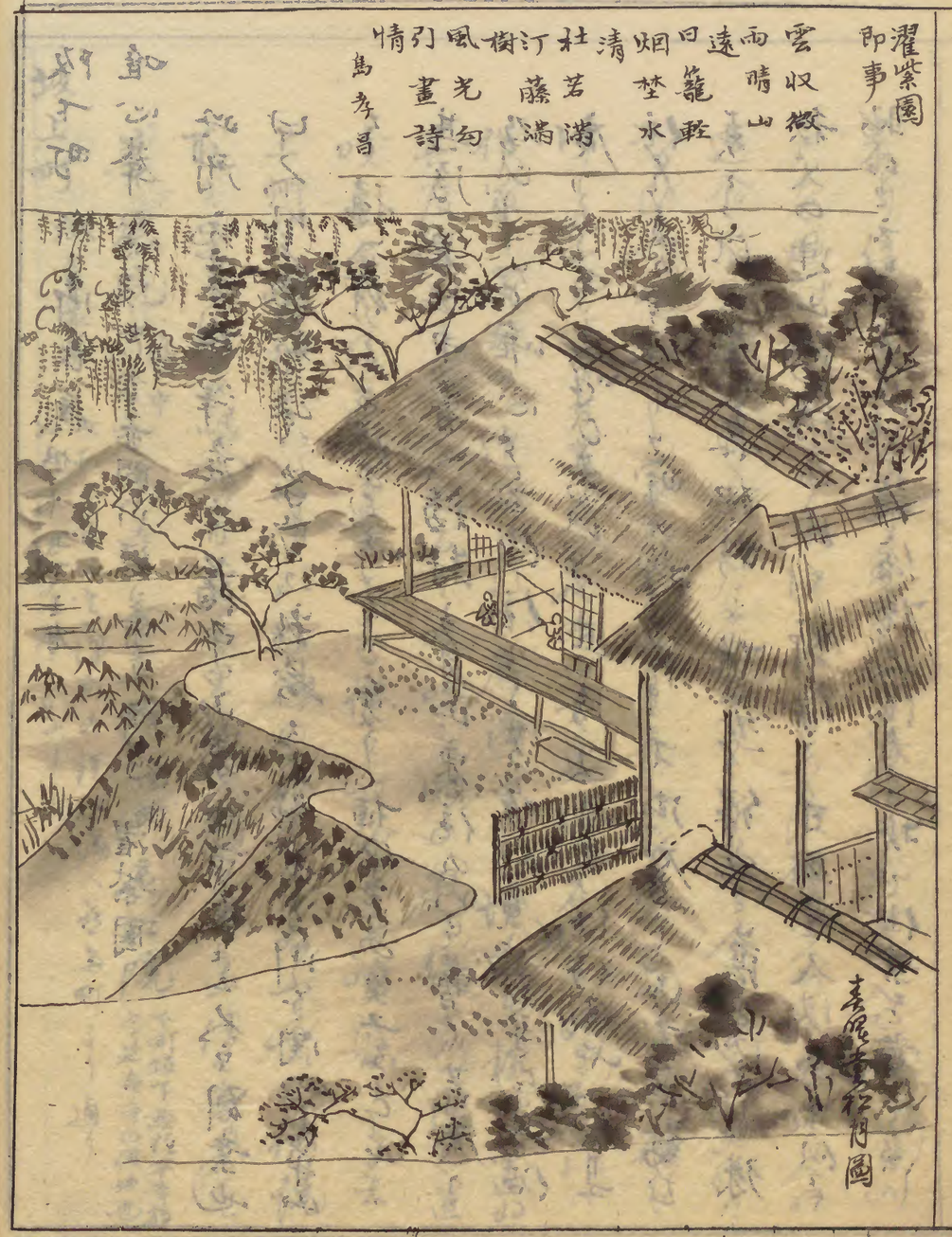
金毘羅祠　稲荷ニ祠　白山祠　三峯祠　ホ有

嘘婆〳〵塔　門内北ミ方ニ有

元禄ミ比〳〵や上州厩橋の浪人伊某由縁ありて壱多所ミ

来り住すること有る時夜半ごろ戸を叩けども人答へず彼人の後より付人此
這入りしを見届けんとて戸を少あけて見届人家の内を見ると長三尺程の石にて其夜ち
ひ炉を興し家の内を見ると長三尺程の石にて其夜ち
ゆうとふく片付置き夜明けて見れば石塔し如き石なれば
信家に置難く近所なれば廣濟寺に境内牛稲一置ば
其後祟云々なく此石に咳嗽し頃の数に縄を以て縛り置
咳毒薬に成薬を供養世俗是を噎塚と云
上州に噎神おはしませり此神の祟りなりと云伝説
取り見ると此と此と善く里俗に膳奚を供養のき
善德院 陸中門内有 未寺 長喜院 南町 長松院 下町坂下無住本寺格今延命寺の借地也
坂上町 獄舎裏宿 此所に昔は宮沢町の刑場へ参る町より通り

阪下町 御長屋但し上下に有
唯心庵 志多町分赤間川涯に有 赤号 濯繁園
此所元来柳澤侯に藩中 山東小市郎と云人に別業也
此人風流老にて赤間川を隔て紫山
を接へ稀に此の所も奇石を愛し植物を多く工夫せり
其後君公甲斐へ移封ありて山東住のいとて暫く荒廃に
及びしを唯心と云僧住るに唯心庵と云へきを世俗
庵りしを呼ひ来れり其後又下町住伊勢やに其
住るに今は十ヶ町の持となりて御廟し市宿を勤む
夫に比い紫藤松杉に梢に新緑あり叢をひさし殊に
秋父の連山波濤の如く野徑に寸馬豆人は画く似く
眺望云へ方なし 詩宿孫人涯有を携て佳景を賞せり


耀紫園即事
雲收微雨晴山遠日籠輕烟埜水清
杜若滿汀藤滿樹風光勾引畫詩情
島孝昌

滿笹金
維迪

松ヶ崎情水と題する墨色あり

蒙の毛是迄の所作なり

松ふ苔化人不かくふ不事

おほうさい時うきよふ松花

空と雪と苔と日和と松ヶ崎

森風高き志賀の浦なる白ひ高き

白苔也白きる人の巣地先

松ヶ枝を冠と岸のさきひひおえほひめ蛍坊

酒樽を知きは清士が涼の高きと取れる貝の盃

ふらくと松の葉越の苔のもひ時の月の

三四方也四位の侍従と時の冠の細の紫地ふる

友坂梅翁 宗因

其角

買明

寒松

楚峯

松曙改 其馨

斗明

茂躬

永安

持主

模正庸

三芳野外一茅亭　敵戸苺苔没径青

避暑避喧同遺世　涼風吹袍歩園庭

志多町　志多町より一帯地形低くして下町の名あり

東側裡廣小路と土手八幡享保年中小町が出火ありて

火除しあり小築せられ　封疆く赤橋のたたと封疆

あり是八寛永年中伊豆殿と命ずく築く所也

長松院蹟　志多町右下へ行く小側ふり芝居

寺号　寺号　鷲山山鷹

稲荷山稲名院東明寺　時宗　藤澤　清浄光寺之末

本尊　虚空蔵菩薩　座像　運慶作　拾士　阿彌陀　觀世音

脇檀　一遍上人　真教上人　藤澤遊行之二寺　當寺之開山也　臨阿　阿彌陀佛　當寺二代

紙満閣　本堂之額　野呂氏之書

赤白の二狐
佛師を誘阿彌陀
佛
ノ授ル圖

国立公文書館
National Archives of Japan

緣記曰　省繁採要文

夫當寺ハ藤澤ヲ遊行才二世真教上人　人皇九十一代
伏見院御宇永仁年中諸國巡行ス　折ル此地ニ
来リ給ヒシ所ニ一小堂ヲ建テ備後ノ国ヲ教上人
ヲ崇敬シ餘リ御寺ヲ臨河寺と名ヲ付ル
因テ上人暫ク居ル止場ニ草堂ヲ焼刹ル
ル　其教上人ヲ開山ト臨河彌陀ヲ二世ト
ス　元来此小堂ノ本尊薬師佛ナリ故ニ臨河彌
陀念佛ノ道場ニ薬師ハ来ハ中ナリ　ヒ
ル或ハ赤白ノ二孤佛像ヲ安置ス堂ノ傍ニ
置ル陰ニ不奇異ノ思ヒ夜明ケ
ル小虚空藏ノ像ナリ此菩薩ヲ冠中ノ

五佛ヲ奉ル　阿彌陀佛ヲ念佛堂場ノ本尊ト
ス　歓喜ノ思ヒ堪ヘ此ル像ヲ本
尊ト　薬師佛ハ夢ノ告ナリ
是野山中ニ贈リ給ヒシ　粉垂ル　緣記ニ有
是ニハ其要文ヲ取而已
抑此寺ハ昔兆域廣大ナリ　寺領ハ若干今東明寺村
寺野三ノ村寺山ト村ニ皆以テ寺務ナリ　天文年
中兵乱ニ為ル諸堂什物ハ焼亡ス　寺務衰微
上杉小傑ニ両家ノ為ル減ラレ　凡四百年ノ無
廢度ニ也然ル河越市中ニ一ノ古キ浄刹ナリ
天文十五年ノ夜軍ヨリ古東照寺口ノ合戦歟味方ル
死亡多キ故ニ　宝暦年中寺中

南之方ニ古墳ノ址ト云フ　古墳崩れ　ヨリ四ツ髑髏出ル五百ヨリ
是全く戦死之者同穴ニ古墳ニ宝永年中ニ
下町ノ側仮墓ニ裏ニ塚を堀ル小髑髏三百斗ヲ
出ルヨリ云是ハ首塚なるへし

阿彌陀堂　門内ノ北ノ方ニ有　由緑ハ詳ニ

稲荷祠　門内少シ南方ニ小高き塚ニ上有是当寺の守護ヲ祭リ
来リシ所なり二狐を祭りて鎮守稲荷と崇ムなり

末社　熊野祠　菅神祠

諏訪社　或人云是ハ新田殿弾正の宮を祭る也云ハ多の
古井ヨリ発ク戦死の地なれハ為もなるへし

鐘　往古ハ有しかハ中比兵乱ニ紛失せしを近来
素覚上人ニ代寛政六甲寅年再ひ請て懸る所也

銘文畧　治工小川織ヲ為勝　奉鋳造　童阿彌陀仏
大乗了信

枯水庵　東明寺門前ノ側ニ有元禄戸屋河集ニ隠宅
相見しハ普賢上座住ル禅宗ニ為ル

東明寺橋　志多町ヨリ下角村ヘ渡ル赤目川の小流ニ
昔ハ真行寺ニ前の宮ニ橋ハ松山ヘ大道ニ

五箇村　五ヶ村ニハ合ニ地ふれハ悪石を敷く云ル
橋より西ニ道を松山街道也

鳴巣街道也

神明宮　往古より此所ニ石ヨリ勧請あるしハ天文ニ此兵乱
ニ為乱妨を恐レ別当ハ当神基神鰐を負ひ去らんと
ハ力及ひ難く
ハ三尺斗ハ石なるハ力及ひ難く
地中ニ埋レ逃去り此年経て関東治国ニ
ニ後従別当ニ孫大宝院ニ云ハ摂河戦ニ
九馬場ニ住し先祖の云伝ヘ神躰ニ旧地ヲ

後ハ上断東西寺橋結ぶ迄神明山と云名ヲ付て
宮居ハ不見と雖も其地を称ス此方新しきして
神躰を埋葬り依石祠を営み別當法印を九号
坊より此地ニ引移り住ス今別當長永山良学院
是し昔山派ニ属ス云
或人云神明の神躰ハ男根石なりと云へ共形チ異なり
伊勢ハ神明神秘し御正躰ハ心の御柱と云有ル
恐くハ此心の御柱ハ似り如し神明ニ
崇敬なるハ必然し

至誠山成就院真行寺

浄土真宗 京都東本願寺末

石華表　石手洗鉢ハ有碁

此寺昔ハ和町辺ニあり旧記紛失ス
年暦ハ不詳　其比ハ言宗ニ今僅ニ古玲一口什物ニ有

中興開基　真行尼
此ハ行尼ハ甲陽ニ武田家の姫君ニ云甲陽軍鑑ニ信玄ニ是女病ニ有て
留主浅間ニ祈願ス有
其姫君の名ハ天ヒ比甲州滅亡ニ砂金山氏ハ某
岩嶋氏ハ素ハ抱せられ愛ニ遊遊来り
尼と成り素言宗ニ廢寺を取立ツト云依石紛ハ武田
菱を用ル金山氏岩崎氏ハ今吉見の荒子村ニ
子孫行ニ菊寺ニ擅誠たり

本尊　阿彌陀ニ立像　春日佛師ニ作

脇檀　祖師御影　御裏書一如上人
貞享三年ト有

太子七高僧ニ御影　御裏書常如上人

聖徳太子堂　門内南ニ方有

土橋　東西寺橋ニ下ニ有ル村ヶ
九号陽宮下ヘ行く道ハ架ス

田舎　百姓家有今ハ
御陽中ニ入交り有

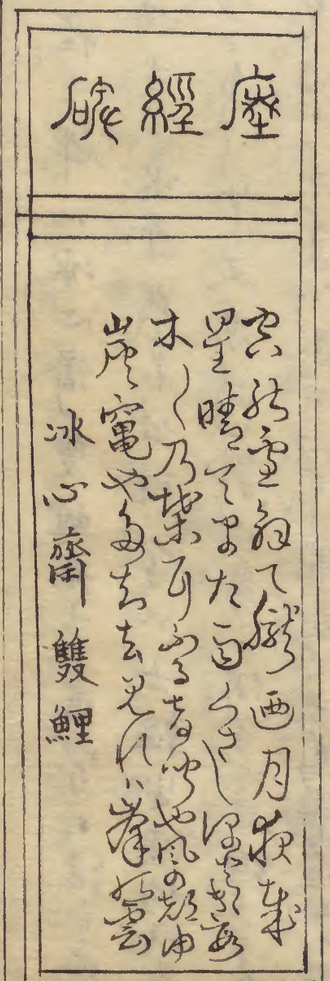
高澤町　此辺初ハ竹澤九郎と云人起立し町名竹澤と云の
以つゝの高澤町と云り井沢九郎ハ竹澤右京亮と系
人なり也井沢氏と未田高新田あり是も今絶家なり也

来迎山紫雲院大蓮寺　浄土宗　蓮馨寺末

開山感譽上人　草創年暦不詳
或ハ曰此寺ハ酒井河内庵御城まゝ市時　三州より来ると云
猶三尺ほど同名ゝ寺有厩橋ゝ同名ゝ寺有と云
本尊　三尊阿彌陀　座像　御頭ハ惠心ゝ作　御體ハ二菩薩ハ別作ゝ
八幡宮　門内西ゝ方有　神躰ハ阿弥陀ゝ古佛也
鐘銘　蓮馨寺十五世　楊蓮社稱譽上人　文畧
元禄七甲戌年七月日願主　坂部氏利重　鋳工小沼播磨守正永
古碑　本堂ゝお西ゝ方ゝ有　長七尺斗　幅壱尺斗

上ハ梵字を鐫て　中ゝ光明遍照ゝ四句文有下ゝ弘長元
年七月一日ト有　由縁不詳
老樹翁貞陸居士ゝ墓　建長三辛丙寅年七月　行年百六歳
辞世　うくかくのあれとたうかりはてはそのあるとは有ん
　　るまの　やはハ　節ふしまゝ
貞陸翁ハ秋元族ゝ藩中　俗稱　薩田佐助と云貞徳門ゝ
心流ゝて　俳諧をよくゝて若き時浪人ゝて江戸ゝ有ゝ
八百屋ハ吉ゝ多習の師なり　彼少女ハ犯罪ゝ婦婦ありと
以ゝとも　戯場ハ名高ゝ番ゝ児女の知る不ハ者ハ

座経碑



冰心齋　雙鯉

此經を座の碑ハ水心齋雙鯉居士の書寫の經を座
所し居士ハ永井氏名公琛字ハ士韞生涯痼疾
と俳諧を角〳〵世又月花のいとまに佛ゝつの經を書
写して寛政十一未年正月十四日卒友人中嶋櫻曙松本十因
白川居雲歩ゝ居士の写經を天蓮精舍の傍に葬て
碑を立つる所也委〳〵碑陰に彫る　手向吟有　櫻曙
手向ゝ言の葉ゝきを鳴く蛙　十因
飾舞手も舞　塚此前　雪歩
琴ゝ〳〵て柳の糸ゝ乱ゝ
爺模　焼松　老樹二株大蓮寺に門前にあり
享保年中に門善清と名ゝ代ゝ住持の例ゝ
始ゝ此所に移しの者皆此所に住ゝ

寿昌山天性院見立寺　浄土宗　蓮馨寺末
昔蓮馨寺草創ゝ時此寺を先ッ建て建立寺と
を後見立寺と書改旧地ハ蓮馨寺ゝ境内ゝ有今六
反畑と云火災の為ゝ焼ゝ失て今の地に移る
開山感響上人　本山同
脇檀　十一面觀音　安置　秋葉祠　寺中ゝ有
水村氏　當町ゝ陌長ゝて昔より大家也故ゝ宝器多
先祖ゝの持傳ゝとして神屋別當實盛ゝ鞍并沈を
孫藏氏　長月ゝ茶碗　繪高麗　小堀廣蓋書并沈ゝ有
蘆屋釜　牛島弘福藏牛禪師所屬也　其外名器墨跡物品多
井上氏　先祖ハ丹波國篭山の武士にて故有光秀ゝ孔を

さけ道を求りて愛に其時丹波か持来る刀剣有
又親鸞上人六字名號 蓮如上人六字名號と共に丹
波にて齎来る而て其外教如上人宜如上人十字
名號土蹄藏也 伝る所号本國丹波を用ゆ

六丘稲荷社 字塚ノ西に隅毒乃川に唯に有
時庚寅年歴 り伴
里老説曰 古往武蔵ハ一大廣野にして不食地にて
中古に始仕國に司荒地と田圃数百萬を闢く
に初て入る郡に山荒丘六り多し故を立て稲生
神を祭る其後太田氏道真始め置城に時五丘氏
壊て一祠と為て今此稲荷祠是也 宝暦十庚辰年
正一品に神位と爵を安永元壬辰年今に祠跡離を留む
或云今河戦に六ッ塚稲荷と稱る祠所に為りて

今六ッ丘に在る故に云 亦河戦高麗と云書に六ッ塚の
説有り河越七社に稲荷社と云るも此の流可
らんや其是非を考る

六丘神祠記 寛政五癸巳年高麗に里正井上信誠に應常
青陵皐鶴に撰し畧文

鐵炮場 昔多流に角坊地近来所屋敷建ッ

高澤橋 字塚ノ西に渡る毒乃川に架せ

赤間川 入る河に枝流也
此川を常に赤間上に婦幸下の名有り下に東に橋の
辺迄多し大サ岩の流るに信せ毎年甚し荒
家の宅基感ふして 数百堤に成る大石を乃ち信
宅を賞住て以ふ或ハ飛ふ数乳して其面に風景色云
以ふ所に迄客多に来りて 道遥せされと近来解剥に

赤間川

橋本義

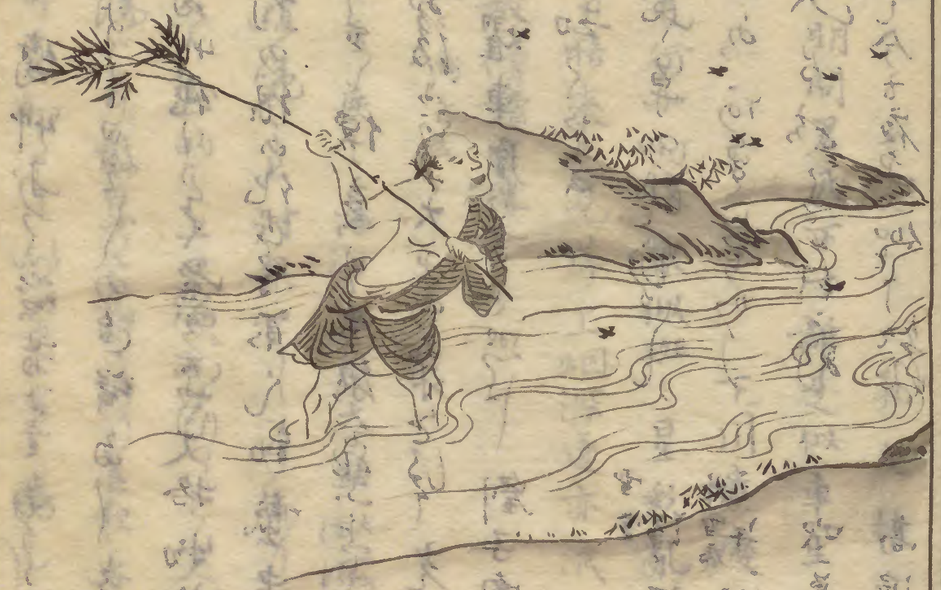
やこの山ふと
ほそく
ふかく
宵の
おもて
ゆくもの
宿かりて
なるか

向晩尋涼

赤水邊

蒲蘆嫋〻
艸芋〻
羣螢光冷
頻来去
愛此風寂
月晴天

嶋孝昌



国立公文書館
National Archives of Japan

隨ひ川海ひ度くなれい腐艸おく蛍昔事多くも
却名をあらし川の上に月より日をしの重賞多くを云
蛍ハ禮記に以くるめく腐艸化くて蛍となる又格物論
曰蛍ハ腐艸乃ひ爛竹の根の化をなる而し初蟄虫の
時もてみ光あり粉日ふくて便変くて能飛ふをを信
還らに化よ生れ大暑くに成ふて大火の氣を受て光を
発をを一名夜光一名燈燭車胤ハ書を照し劉子南ハ
螢火丸を佩くて矢を却く蛍云

蛍隠逸の徳くや草のひとむらし　雪堂
女うくさくふ草のこのまに蛍かな　獅雪庵午心
深夜螢
埋火ふ角をくらめくる螢とも今を夜ふの仰とてなれ　吹萬
高浪

螢

孔文雄

度水来還去傍林暗復明問君天下士誰是似車生

同　下川貴慶

青蒲細柳水郷秋燈燿宵行小雨收散似斑斑星彩亂
聚如點點露華浮牕前月暗来先見岸上烟深逐亦流

好是涼風吹不滅徘徊故傍讀書樓　高澤橋々東明寺橋ニ同を云

辻り淵

夫所ふて寛永年中伊豆庚ニ藩士安田大助（大工町ニ住ス）
深尾伝右郎（大久保町ニ住ス　今横新田町と云）頃篤ニ上討果せしるあり此
為士高家所ニ角場ふて毎的ニ上口論およりり人と
扇を以ふ中へ其場ハ多く姫ふ宿ふ為其歌安田
大助老母ニ志ふ〜ふの子を如ふり以きふ〜暗ふ

深尾作郎方へ果し状を附け今宵辻り渕の邊より
出合へき旨申送り送り状は深尾方武士に習ひ兼紹し
接待多く別段政方の應寺に裏門あるて
行逢ひ言葉を掛し暫く切もつれしら中田清左衛門を
斬り伏せ中めをさし本意とけ其外を救ひ負
ひやう〳〵菩提不見立寺迄引取切腹をもとけたり其外を
伊豆庵聞名別名出田あるら若者と出しこのひりるを也

石原町 小久保村 昔小七町より旅宿を始め来る家多し

高澤山妙智院觀音寺 天台宗 東巖山御直末

中興開山 權大僧都 長盛法印

本尊 正觀音 御長七寸弐分 弘法大師之御作

寺記曰往古此當像ハ空海之筏佛なりこの東國行脚之
時高天原の石上に大師暫く爲ふ止場しのひ当像をお世
話緣の為此所に殘し置のふ其後何時か為篠田三郎行家
と云武士 石原之光田圓之中ハ篠田稲荷の
森有其所篠田三郎の屋敷跡也 世継なきをなんき
此觀世音に祈りをなし程ふく本後を男子出生其外
稀に奇瑞を顯し仏像と信しなる分以来念
諸人種々の願ひを免るふ霊驗顯れ形を顯るるのし
中古羽黒派の山伏之寺と為ふ此迄に羽黒派之本寺
たりしの兵乱に為ふ荒廃しる僅の仏堂之内に大日如来
と観音と而已あり寛永年中高澤町之名村氏
實翁大檀越となり長盛法印と心を合し天台宗と為
東巖山と印直末と也法堂及び庫裡門普請建立
其後正德年中慶俊法印之代に妙智院と号を

東叡山ノ免許也

惣門　仁王門　金剛神安置

撞樓　鐘　銘文畧　撰者　真光寺権僧正佛印ト撰

鑄工　矢澤隼人藤原種求

享保七壬寅年仲夏日

願主武州高麗郡下廣谷村長峯伍五右衛門正次　惣檀越中

雜財天祠　仁王門ノ南方池中ニ有

淡島祠　稲荷祠　天神祠　疱瘡神祠

大日堂　大日如来安置本堂ノ辰巳ノ方ニ有　中古祠黒沼ノ時ノ本堂也

百躰觀音堂　本堂ノ後ニ有　西國坂東秩父百番也

法堂ノ本尊出山成道釋迦　天竺佛　城ノ奇木異像ヲ作ル

則水村甚左衛門　法名實翁ノ納ル所ノ自筆ノ寄附厨子

ノ裡ニ書テ曰

此成道釋迦佛者。蓋天竺所彫造而唐僧大眉。持所来渡實。未曾有之尊像也。大眉付之祖寂。寂付之千山山。付之無為虛。先父松悅得之無為虛。安奉家室堂。以結香火之因。已久矣。今茲壬辰之冬。諸善男女。新刻觀音百軀。於高澤山。殿宇既成。予謂如此尊像。自出吾家堂。安置之百軀中尊。助吾二親冥福。亦使人永結勝縁。則其利益不可測也。因寄附此像。且書其志旨於龕後。以告後代者　武州河越住奉三宝居士

正德二壬辰年十月十六日入佛　水村甚左衛門尉法名實翁宗賢謹誌

百躰觀音堂之聯

六年端坐沒溺深泉空勞佇思

一旦投機掀飜大地益利群情　弘福七十二翁識ル

石原観音祭
さくら獅子の図

柏

偏木摺

櫻爾其馨

黄淡斎元朗画

国立公文書館
National Archives of Japan

偏木獅子舞　毎年三月十八日　觀音祭也

獅子舞　三人　花笠偏木摺　五人或七人　山神　壹人

猿田彦　其外集よりて稚子の作物を出し

石原中の駈ひ鞠　らら拍の形獅子舞の唱歌

留の姫なと云へる古雅なる田樂の俤なるへし

袋町　此町行き留りまて袋なるのゆへ名付くと云

教法院　當山修驗三宝院御末　正進山不動堂　御長尺七寸　理源大師の作

本尊　不動明王

當山の觸頭南八膝折の辺北八高仮の辺也石階の辺

永昌寺　武州足立郡美扇の辺西八子權現の辺也

神明宮　院内に勧請

水車　宝永二乙酉年大沼仁左衛門なる者此所に水車を取立と云

長久山本應寺　法華宗　延山久遠寺末　身延山久遠寺世代の上人也　久輝山感應寺世代の上人也　同記紛失する依て年暦不詳

開山　日長上人

中興開基　日春聖人　明暦二丙申年八月十三日入寂

此寺初八江戸谷中感應寺末たりしを故有て當寺に

七世日容聖人の時甲斐國身延山末となる

本尊三尊十界勧請　鬼子母神等　安置

服檀　高祖の御影　失

撞樓門　安永年中焼

鐘　銘曰　謹奉推鐘鑄現當二世諸願成就砌

延寶三乙卯年十月吉祥日　諸檀越一結

當山五世　日勇上人

同氏　小沼二郎左衛門尉藤原重政

播州寺藤原正求

番神堂　本堂之西ニ有　三十番神　并日天子
月天子　明星天子　摩利支天尊　安置
稲荷祠　當山地主神ニ　鷺大明神祠　庭瘡之守護神也
雑財天祠　七面大明神祠　共方丈庭中ニ有
塔中四ヶ寺　西之坊　東浙坊　真善坊　圓乗坊
讀經祖師　各乗坊ニ安置　未知誰作之事
此秘佛の祖師ハ元来松山城主上田周防守天正四丙子年
感得しぬる当像ニ天正十八庚寅年松山城
滅亡ニ後真宗長澤門某者頂戴して西越ヘ
通れ来り島田村ニ住居ス当像を圓乗坊ニ
寄ス和尚ハ御厨子ニ河越記を以て封ス高祖ニ
御影と称ス去る頃ハ或時御厨子ニ内ニ讀經の
形ヲ見れ人ニ奇異ニ思ふ此本院上人各乗坊
等ニ議して戴を開き經を讀ニ御厨子を開く高祖ニ
御像を其後も折ニ此当像の讀經の声を聞く者或ハ
ハ為ニ慶幸を得或ハ為ニ災難を蒙れし者あり故
ハ世人讀經ニ祖師ニ事なる寄寄代の霊像凡作ハ
愛宕祠　石原町南側　昔ハ有ニ天明年中　再興ハ又ハ
崔森八幡宮ニ旧地　小久保村石原ニ先祢文街道ニ　今方丈庭地杉一株有
河越記曰ハ畧　坪ヶ西ハ一ツの社檀を切ら
ハ切れ　祖師ハ此ハ　ふち里ハ交り和光同塵ニ
俗縁ニ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
宇佐八幡宮を　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
此森昔ハ大社　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

田圃と為す故に宜しく此を以て山御社と
向ひ小久保へ引き今向小久保村の氏守八幡也

江戸町　古名東町此町を昔は江戸街道と云
故に自然江戸町の名を移す様と昔は此街市中
沙一の繁花なるより寺社江戸町と唱へ習はせりと云
次原氏　昔より江戸町に住し家古し大道寺孫兵衛
直書粉失せり元禄四年癸酉十一月廿八日
大道寺政繁より繁の字を名乗よと次郎三郎へ賜
書なり有又次郎三郎より名前付る書も此
新三郎新蔵は親子なりしかるに後あれども故に行
兄弟に家を別家なり新三郎に家は今絶て
新蔵に家今相続しに江戸坊の保長也

裏店と号す　江戸町西側に裏店あり
元禄年中青木古庵と云人の所ひらかれ
以仰付たり柳澤侯御時代也

大部屋　江戸町東側横丁なり稲荷祠 清水稲荷有由来
多賀町　元来桶師取立て町なれは桶町と今以
桶大工役儀を毎年出て依る諸役は免除
孝子清七之事　茲に湯屋清七なる者老母に仕へ
て至孝なり云へ素貧の寒き夜は母を抱て我衾を
うきくし　九夏之伏の暑き頃も敢て蚊帳の中
団扇を採て母を安くせんせむ清七六十近に
なれども母に事るに於幼年のれ毎に母の命を
親ひ孝なるを勤む其至孝

太守之廳ふなり　天明二壬寅年　両禅師之像
清七生涯事技抜萃置り人の行ひ高く
大ひらるいなし　和漢の明王德を敷て下を化する時ハ
必孝子あり　仁政を遺れ千載の後まで輝く

瑞光山醫王院常蓮寺　天台宗　仙波中院末
開基　觀智坊　元和九癸亥年正月廿六日寂
院号山号ハ元禄十五壬午年　免許
山塵師堂昔ハ本町南側中程ありしを元和年
中酒井備後殿之時今之地に移し一梵刹と
して常蓮寺と云今の地ハ庚申塚あり今ハ
寺内之河
本尊　藥師如来　立像長貳尺斗　行基之作　脇士　日光　月光

拾檀　十二神将　聖德太子　青面金剛　安置
庚申塔　堂前東之傍有　稲荷祠　金昆羅權現祠

時鳴鐘　三重之樓門之上に懸ル
其鐘破壞に及ひ　河越時之鐘ハ昔より有
再ひ鑄改のよし銘曰　延寛應元年　伊豆庚之時
武州入間郡河越城下
時鳴鐘損壞於是當時城主
侍從源信綱命冶工新鑄之者也
寛應貳歳癸巳正月吉辰　冶工推名兵庫鑄之

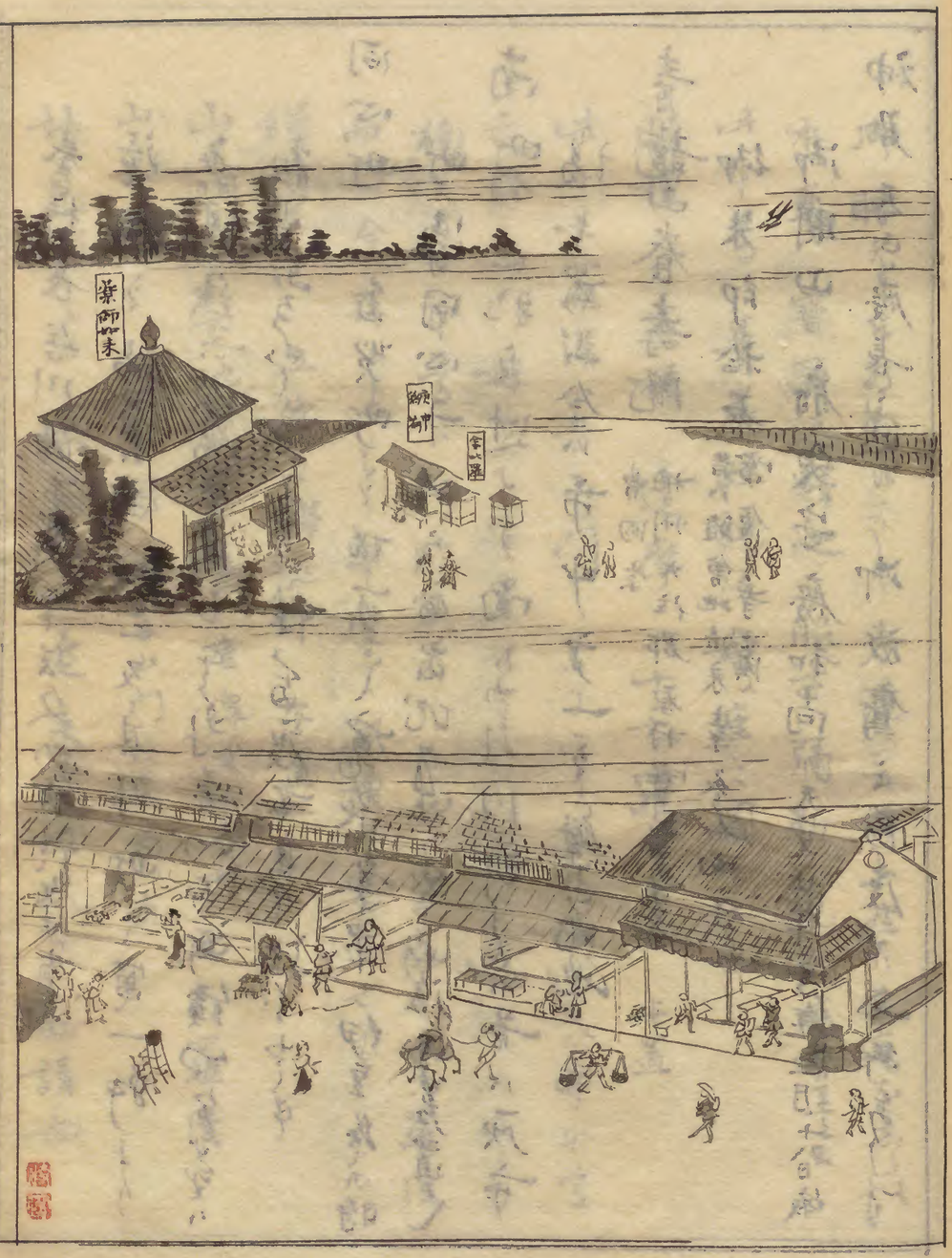
鐘撞屋敷　撞一人住
昔蓮寺之境内にあり　撞堂之西に隣て此地ハ元来
多賀町　山口ゟ本の南屋敷を皆此地に移り其時の

多賀町時鳴鐘

梅雨小
雨を
誘ふや
ほつほつ
戎寺

悠然居
把菊

墨池庵
慕舊翁藻彦寫



奉行長谷川源右衛門殿云人の古法文は有
撞木役分ハ田畑三反其外町ゝ寅一野より
毎月廿六ヶ所ゝ集む所外寺ハ町ゝ分ハ
初ゝ寄ゝ所ゝ集る所ゝ拾分ハ

同心町　多賀町ゝ横丁ゝ寛永年中　伊豆殿正時
町御同心十人ゝ居地所なる以後所替遣ル

南町　北ゝ辻より南ゝ開ハ別ゝ云昔ハ庚申
場ゝ云今ハ市中中一ゝ盤所也

青龍山養壽院　曹洞宗　相州大住郡原村寶泉寺末
御朱印拾石　昔ハ隨會地近来素參和尚之代
御開山　前與守慶和尚　天文廿年辛亥年三月十八日歟
神君　天正慶長ゝ比　御放鷹ゝ度ゝ御ありて

御腰をゝ為ゝ寺院ゝ云伝ハ其寺を建
本尊　寶冠之釋迦　脇士　彌勒　觀音　或勢至ゝ云
ハ本尊ハ華嚴經說法會座ゝ圖ゝ云也

脇檀　大權　達摩　十六羅漢等　安置
ハ十六羅漢ハ昔山門ゝ上ゝ有ゝ其外楠正成ゝ守護
二躰山門樓上ゝ安置也　寺ゝ旧記ゝ有ゝ
楠ゝ守護ハ行ゝ失ゝ　今ハ十六羅漢
而已今存ゝ　本堂ゝ檀ゝ安置也

禪堂　立像之釋迦佛　安置

山門　六地藏菩薩　座像丈五尺斗　五百羅漢

山王社　白山祠　共ゝ山門ゝ東南ゝ有

妙見祠　山王ゝ祠ゝ向ゝ　近来横田氏ゝ勸請也

惣門　東面　禁葷酒石牌有　裏門　北面　高澤町出ル

本堂額　三世佛　筆者不詳

山門額　願王閣　禪堂ノ聯筆者不詳

悔謝其霖養續法佛壽命

長接毒鼓摩截列祖根源

古鐘　本堂ノ内懸ル　銘曰

武藏國河肥庄

新日吉山王宮

奉鑄椎鐘一口長三尺五寸

大檀那平朝臣經重

大勸進阿闍梨圓慶

文應元大歲庚申十一月廿二日

舟治久支

大江真重

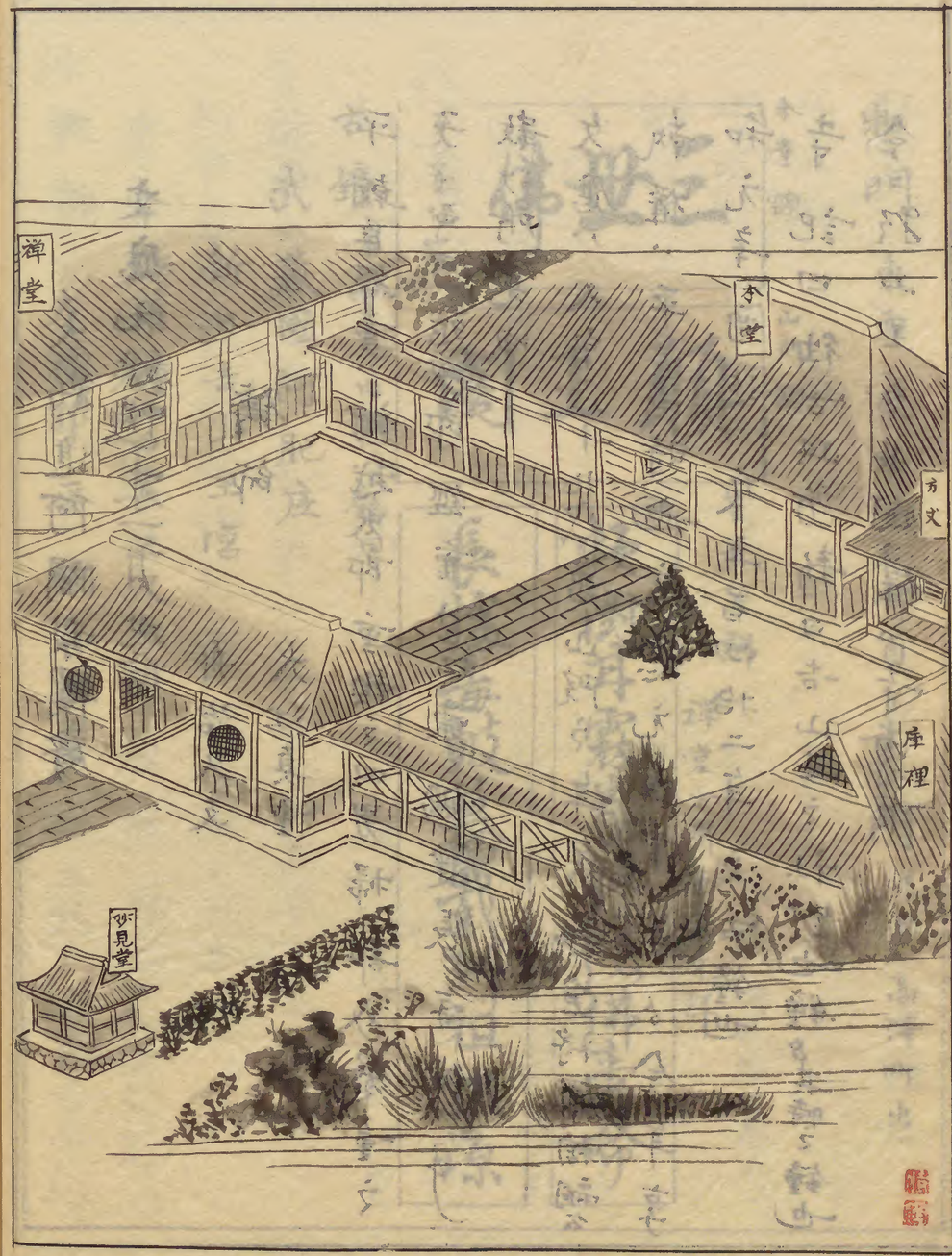
鑄師

平朝臣經重ハ河越太郎重頼ノ四男掃部介泰重ノ子ニ云ル河越四郎經重ト云東鑑建長年中ノ事數ヶ所見ヘ

文應ハ人皇八十九代亀山院ノ年号鎌倉將軍頼嗣公執權ハ平宣時也文應元庚申年ヵ今年享和元辛酉迄凡五百四拾二年ノ古鐘也

寺記曰往古此所新日吉山王ノ社ヲ也鐘ヲ其時ノ鐘也今ハ山王ノ小祠僅ニ寺内有

稲荷門
手水所
山王社
白山社


禅堂
本堂
方丈
庫裡
妙見堂

或説ニ此鐘ハ上戸山王ニ鐘ニト云ひ或ハ仙波山王ニ渡ス云
然ル其説何ノ迹ナ拠ル哉

東鑑廿六曰
廿八日　癸卯　文治二年丙午七月大湖丙子
新日吉領武蔵國河肥庄地頭對捍ニ去ル年乃貢
事。并同領長門國向津奥庄。武士狼藉事。取
庄家解状被下之。早可令尋成敗給之由。被載
之。去六月一日ニ御教書也云云
案ニ新日吉山王ニ社　坂本ニ外五箇所ニ也有ル武蔵
國河肥庄長門國向津奥庄此両庄ハ彼新日吉ニ
社ニ寄セ来ル所ニ河越太郎重頼其子恭重其子
経重代頼ニ此所ニ

鐘ニ此所ニ殆リ留リ〳〵ヤ又河肥ニ音新日吉ノ社
別ニ有ル〳〵ヤ狂後人ニ鑒正ヲ待而已
古墳二ツ本堂ニ坤ニ有リ河越ノ太郎重頼ニ塚ト同四郎
経重ノ古墳ト云今ハ稲荷祠ト神明ニ宮ヲ建ツ
古碑堂ニ後林中ニ有　上ニ梵字ヲ彫ル中間ニ
嘉慶二戊辰年　諸衆一訣　逆修敬白ト有　由縁不詳
稲荷山千壽院　養壽院ニ惣門ニ前ニ有　青龍山ニ塔中也
開基　鉄山梵州和尚　永禄四辛酉年三月十八日歳
本尊　藥師佛　座像ニ古佛ニ昔ノ當院ニ有由来ニ詳
稲荷祠　千壽院地ニ鎮ル稲荷山ニ云　神　庭中ニ有依ル
養壽院門前町　養壽寺院惣門ニ左右又ハ裏門ニ多ク家町ニ
裏付又ハ御厩下移ル事ニ多シ也養壽寺院門前ニ有
識法院　本山修験　号　鉄野堂　南町分也

本尊　不動明王　不動堂ニ安置
立像根来覺鍛上人作　覺範ハ非ヲ

此熊野堂ハ天正慶長ニ比迫ハ本町ノ南側政角ノ二軒目屋敷也ト云市北側
河野ト麻屋トニ間屋敷熊野堂ニ同地ト云　俗姓ハ榎本氏今本町榎本彌左衛門
先祖ニ兄弟ニ家ヲ子井鉛木榎本ニ熊野
三黨ニ内也本尊不動明王ハ熊野ヨリ移ス事
尊像也元和年中今ニ地ヨリ引移ス也云

南町孝子西村氏ニ事　西村氏ハ家号近江屋名事右衛門
後ニ之厚ト云　二親ニ事ニ孝ニ郡ヲ違ハスニ孝ニ依テ
秋元侯の聽ハ是ニ宝暦二壬申年六月御褒美
ニ金弐拾疋ニ賜ハリタルニ孝ハ今ハ西村
常福ニ父也福ニ孝ハ人倫ニ大行至德要道也
人ニ行ハレ

冷月山長喜院　曹洞宗喜多町廣濟寺末
開山　大翁文廣大和尚　文禄元壬辰年九月廿三日入寂廣濟寺三世也
開基　冷月長喜大居士　俗稱大道寺權内某此權内ハ
大道寺駿河守ニ甥ニ年久ク此所ニ住ク文禄
五壬戌年十二月十日ニ病死後ニ文禄元年文廣和尚
權内ニ居宅ヲ禪刹ニ成ル故ニ依ル号冷月山長喜院
本尊　釋迦座像　脇士　阿難迦葉
脇檀　大權修利菩薩　達摩尊者
鐘　延享五戊辰年三月鑄之當寺六世梅園和尚代
序銘書共ニ梅園和尚也　文略之
白山祠　稲荷祠　雜財天祠　是ハ秀佑和尚代勸請也
朝田山行傳寺　浜華宗池上本門寺末

開山　日山聖人　池上本門寺第四世當寺開基也

此寺草創ハ永和年中なれ共其比ハ小久保町の邊にあるべしと何所なるや御城近く寺院の勢ひ盛なる今の地に移されたり旧記ハ紛失し伝ふ年暦ハ伝

本尊　法華題目　釋迦多寶　四大菩薩　上行無辺行浄行安立行

文殊　普賢　不動　愛染　四大天王　是を十界勸請云

日蓮大菩薩　鬼子母神　脇檀　安置

本堂ニ額　行傳寺　大明既白山人陳氏梅峯書

門ニ額　朝田山　是も陳氏梅峯書　此熱門は

永和年中　草創ニ時建ニ門を其後年今の

地に引て立たり云　九四百有余年ニ門年て

柱あと出たるハ以ての古

番神堂　門内北ニ方ニ有　稲荷祠　疱瘡神祠

鐘　元禄八乙亥年八月鋳ニ　十四世日秋聖人代ニ

功徳主一結檀越　本願主渡邊久左衛門重次　鋳工矢沢種求

無枝櫻大樹　本堂ニ前有　名樹なれ共盛の比ハ枝葉多茂

れしを〻ゆゑ〻花を幽艶し近来枯ハ風のあ

たりなれて今名木のこ存て

児桜　枝も親木を見なれと枝の短冊を占ふひ〻　栗下菴　茂躬

唐人も耳を洗ひ〻　清栢　俊之

塔中　受性院　圓行院　今廢也

行傳寺門前町　東側ハ東明寺村分西側ハ行傳寺ニ

杉多く行く横丁新門前と云元祖集中此道を開ク

墨池菴　俗姓松本氏世〻家ニ住セリ哲齋ト号シテ
墨池庵ヲ結ヒ哲齋ハ書ヲ業トシ立花挿華花
ヲ善〻〻〻池〻ハ方丈ニ住シテ京佛諸ヲ名ノリ身ニ具ヘ
て長頭短身ナレハ自ら瓢花坊尾海と号セ
壽像讃　梟ハ世の浮世を皆捨ての事　瓢花坊

鍛冶町　此儀ハ天文弘治ノ比小田原屬城ニ時鍛冶
平井何某相州ヶ来ル家ヲ住セ年暦ヲ天正
ノ比平井ノ子鴨右衛門鴨ノ匠加藤甚兵衛ノ子
始メ子拾余人皆同街ニ居ル依テ鍛冶町ト云
今ハ鍛冶役錢ヲ勤ル故ニ諸役免除也
延喜式　鍛冶戸主計寮ニ下テ從十月一日至二月晦日爲番役使云

金山神社　祭神　金山彦命　或ハ天目一箇命

姓氏錄云　天津比古稱命子天麻比止都稱命者
忌部祖也　是鍛冶守護ニ祖神也
昔平井治兵衛ノ屋敷西側ニ有シ比金山社ヲ勸請セ
後寶永年中平井東側ニ移セ時此祠ヲ東側ニ
移セ今ハ保長中嵩與兵衛ノ宅地ニ裡ニ社ヲ
祭禮　毎歲二月十五日　前ハ六月一所ノ日待ヲ
當日ハ河越町近郷ニ鍛冶羣集シテ祭祀ヲ
自然山宝林院法善寺　或ハ兼學院トモ云　浄土真宗京都東本願寺末
開山　良海法印　天文十八年己酉三月廿五日入寂
此寺明應ニ比ハ真言宗ニテ良應法印開基ヨリ東本
善福寺末寺ナリシ良海法印ニ時改宗セ回地ヲ
中城内ニ有シ比ト云ヲ此地ニ移シハ寺記焼失セ年暦不詳

道眞河越城を築くの時橋の地形を定めたる樽の
字なり是代を叫けさせ道眞是ふ登りて四方を望撿
きるに西南之方ふ當り繁茂の森ありて富士山を
隠れ間て道眞人歩をきゝ伐森を伐しに
此森之中より石之小祠あり内ふ箭守ら出箭之内を
開きみるに古き願書を込置たり其文曰

源家勝平　怨敵退散　子孫長榮

大願成就　守護　願主　河島成盛

兼安三癸巳天四月十七日

私云此河島氏盛ハ祝父業之内ニ有兼安ハ頼朝公伊豆配流ニ成ル年号ニ此ハ河島氏盛ハ祝父業之内ニ有兼安ハ頼朝公伊豆配流ニ成ル年号ニ如何ニ成ル所謂ありて此願書を施ス成ル考の計

此願書を携帯て道眞ふ様く通ふ芝を傳ふて
曰く是正〳〵當城成就之吉瑞なりと元の所ふ

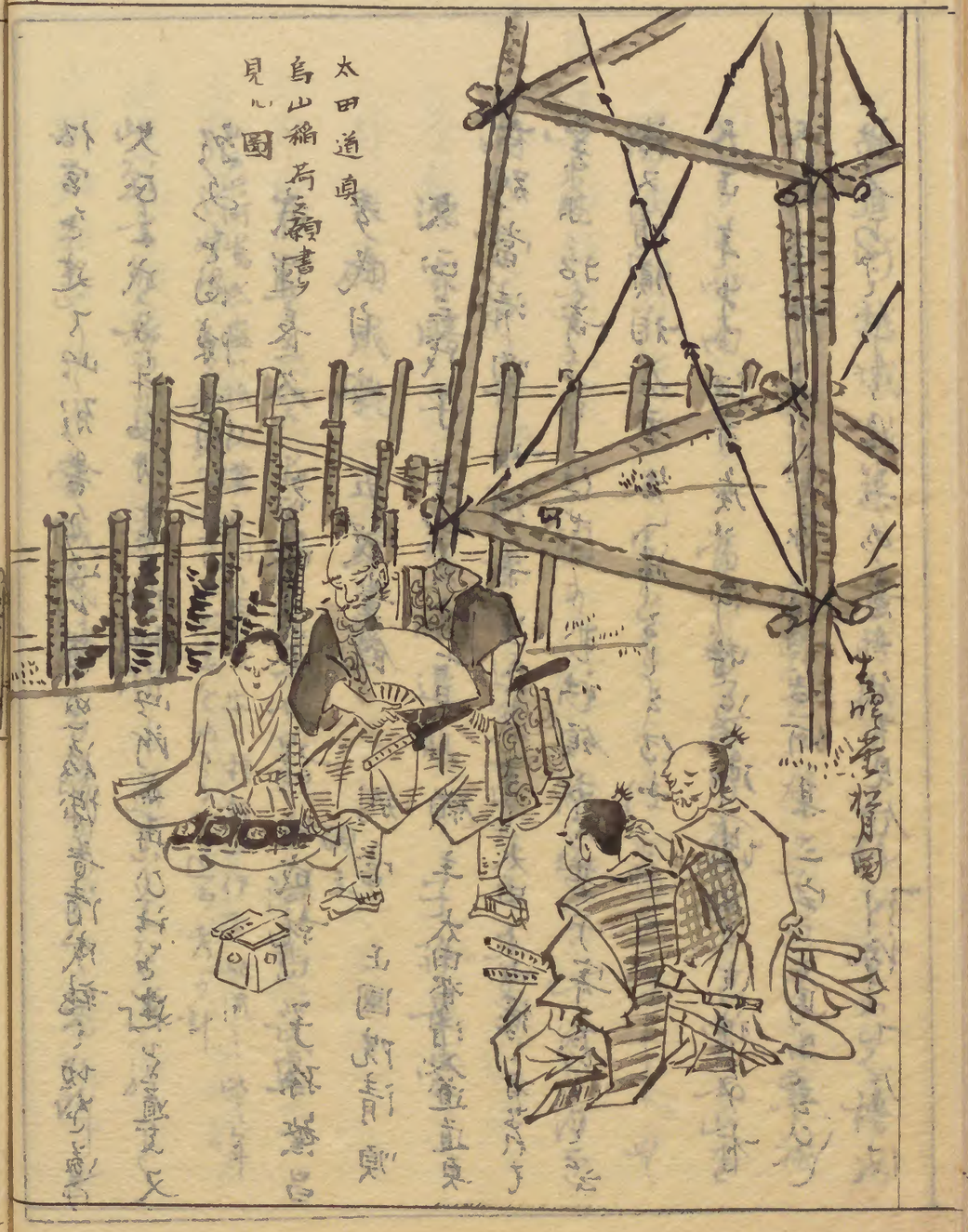
仮宮を建て此願書を込め置ぬ後悉普清成就之切を遂げ
文正二戊子年四月十七日文明元年ニ此所ふ再ひ社を建て道主又
願文を内陳ニ納む文曰

武運長久　怨敵退散　諸願成就　子孫繁昌

夢民自安　五穀豊饒　別當　正國院清順

文正三戊子年四月十七日　願主　太田資清入道道眞

右別當清順ハ相州平生之人なり太田と由縁之者なれも
家ふ招奇せて住せしむ社領ふ若干寄せらるゝと云云
後又清順相模平生ふ帰るとき伊山
天正年中　酒井廣之御時近ハ御崇敬ふ依神号有
天和年中近ハ社家神谷何某之宅ふ移るとなり
社人なるしら後ふめ意ふ任古見領ふ引拾て今は


太田道灌
烏山稲荷之願書ヲ
見ル図

志義町の持なり　祭禮毎年四月朔日志義町より行ふ
鳥山と名ハ昔此宮居森にして鳥多く棲ける中
依て鳥山と名有又河越七社と稲荷社なれも親塚
稲荷なりと云と里俗の説有

瑞巖菴　稲荷河と隣に有養壽院と瑞巖和尚此所に
居住せられ瑞巖菴と云此瑞巖和尚ハ大徳と

孝子善助と事

善助家号ハ小川屋志義町に住して
素麺を製して業とし幼にして父又兵衛に別れ母に
養育されて成長し先母を孝養する事殊に母
多病なれハ朝夕の起居に善助自身助けて人手
ふりけれ共なし病に臥居助ハ地に寝ず毎に母
の傍に寄て御の達する事母の飲食ハ
高價の品なれ共孟宗の筆王祥
り鯉を比せしに或ハ其の所用事ありて四五里隔ある
在へ行ける時ハ母と其所を別れ少母を送りて
も空腹にて帰れる日ハ家に帰り第初に拾を其所者も
へしと善助其ハ筋に歩行き也空快晴
なる日ハ連れのく云く暑れて袷を脱
きのへと以ても善助ハ母の仰なれハ私ハ裸をぬき
如にして寒中なれハ袷を着て寒ハ
又或ハ袷用るなれて江戸より母云くりハ
烈しく此綿帽子をかぶりくへ必寒と云
脱なるなれて母の云くハ古なし帽子紙あるハ
善助是を拾て家かへり出り迎へ

連れの男云くりふハ今なる〻て風邪に以て来りし殊
古帽子持ちて広しけれハ也まきぬ〻と成と母の云付なれハ
とて冲食の〻まき如も取りて汲江戸の旅宿迫ひ行て見
かく母の傍を離れたる時にてよく母の命を守る
事を先父しりけれハ孫子至孝し旨
太守之聽に達し 天明二壬寅年四月御稱美之
餘り御扶持米ニ善四生涯被下賜なり 嗚呼仁哉
國君 嗚呼孝哉善四

御花畠 志義町南側之裡 蓮馨寺之山ヲ小有 昔は
御用の花畠と稱して大工町の方へ出口ありし寶永
年中蓮馨寺の境内繁茂して南の方出口を
覆ひける故草花の名のみ残りて大工町の出口を
塞きて志義町南側小川屋之裏に一ヶ所長浜と借りて一ヶ
所二ヶ所道を開しき御花園の蒲中之屋敷となりし
ハ甚済みしたを西町裏より出し今ハ志義町裏屋
敷地となる

庚申塚 大工町ニ突當りなる今志義町上分之辻所之
延寶の比嫁取れ古橋の樹ゟ享保の此倒れ今ハなし

蓮信山妙養寺 法華宗 身延山久遠寺末
相傳ふ往古此寺南久保町にありし由此寺草創ハ
昔高祖日蓮聖人諸國御修行の時仙波之尊海僧正
とハ叡山にて同學なりしゆゑあるにより尊海僧正
をたつねて此所へ来りたまひし老夫婦之者高祖
聖人の御宿をなし祖師に深く帰依しけるにより

祖師ト種々教化シ給リ法名ヲ授ケ給フ其後
蓮信と云婦を妙蓮と云尼法華ニ行者と
なり宅を三宝ニ奉シ孝心を尽たり
後荒廢せしを天文七戊戌年日在聖人再び
法華ニ堂場ニて蓮信山妙養寺と号し中興
開基ハ日在聖人ニ天正三乙亥年十二月三日入寂
久保町ヨリ今ニ此ニ移ル 宗門録ニ
或人云 当海僧正仙波御住職ハ永仁年中ニ
当祖ハ寂後ニ出ル日蓮聖人当海を是なるハ
当海ハ本仙波ニ御住職なる故ニ時なる
ハ云此説可ふらふらの
本堂 十界勧請 高祖御影 鬼子母神 安置

三拾番神堂 門内北方ニ方ニ有
妙見祠 書院ニ庭中ニ有 秋元侯御廟中 塩内
十大夫なる者ニ勧請ニる所也
鐘 樓上懸 序文畧 銘曰 日怡上人代
回縁和合 寶器圓成 樓上旦暮
般般東東 演説妙法 大夢忽驚
譬如寥廓 體性恒清 一鐘發越
無明即明
元禄十三庚辰霜月吉日 法輪寺日孝撰
日怡聖人ニ代 治工 推名伊豫藤原良寛
日孝聖人ハ深草元政聖人ニ上足ニて子ナて博識也
寛保元年日治上人ニ時再此鐘鑄改云 銘ハ如元用ヲ

七面社　本堂ニ未申ニ方丘ニ上祠有　別ニ南ニ方ニ合あり

此七面大明神ハ甲州七面山ヲ分ケ利生ありしを

末代ニ人ニ絶別る毎年九月十九日ニ取ハ自化字ニ人

来信ニ〳〵賑ハし

末祠　稲荷祠

妙養寺門前町　東ハ志義町ニ隣り西ハ境町ニ辺近ニ

六軒町　昔機屋職由ニ人初テ家ヲ住しより

家ニ六軒あり依テ六軒町ニ云今又六軒町ニ下地

方ニ昔ハ喜ニ亟町ト云ひしニ今ハ妙養寺前ヲ下ハ

出ニつまの御垂水流近ニ恐テ六軒町ニ云　尤松郷ヲ

久太郎狐　昔ハ此ニ人家稀なれも野狐多ク人ニ

為ふるをしの其中ニ古久太郎狐ニ名ヲ付し

尤狐ありしより今ハ何集ニ裏の稲荷ニ祭り

人ヲ化ニるをふしニ云

六軒町新建　三ヶ所ニ有

境町　古名　餅差町　御鷹部屋ヲ妙昌寺家近ニ云

昔御鷹部屋あるし故餅差十人此所ニ住て故ニ

餅差町の名付今ハ西側野田村ヲ東側松郷ヲ境町し

法真山妙昌寺　法華宗　池上本門寺末

開山　日意上人

此寺旧地ハ多賀町中程湯屋ヲ当所近北裏江戸町本町南町ニ

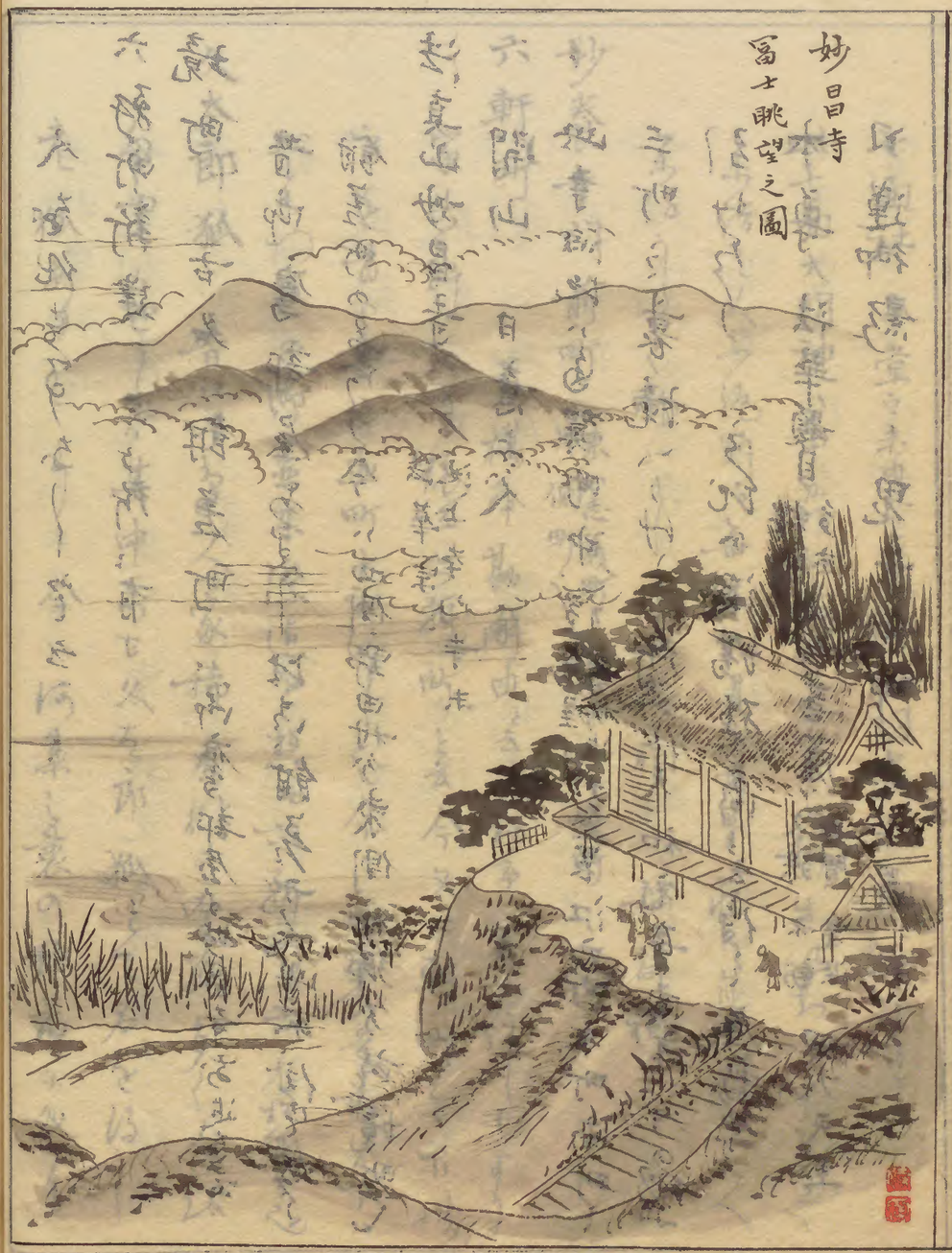
三町ニ裏境ニ付し所ニ天和元辛酉年今の地ヲ

引ケり　ニ紀ハ浅場孫衛ニ云侍ニ屋敷也

本尊　法華題目　釋迦多宝　四大菩薩　文殊普賢　不動愛染　四大天王

日蓮御影　鬼子母神　安置

妙昌寺
富士眺望之圖



国立公文書館
National Archives of Japan

番神堂　本堂の南に有

辨財天女祠　本堂の神の方池中に祠有

三面弁財天此堂像は往古より此所にありて此寺地を神く
又弁才天の池昔妻殺田として此田を作る者悉く
病死せり〳〵恐れて新に此田を作る者あり〳〵
伊豆度の守石芹を作らんと命せらるゝ芹を
作る傍の芹田なる云々後文荒地となるを寛保
元辛酉年此寺に寄附し池の名を蓮華寺に
此池は古〳〵安置せる弁天の像を池中の嶋に安置
し社を營み建つる所なり〳〵池中
杜若多く奇花絶色を法人の壮観也
寶物の内此神の御手に持たまふる所社　津守陸月

辨天の影向なれや蓮子死池のおもてまばらさき蓮　茂躬

此神の恵みの蔵れ蛇復盃子　如松

社檀〳〵布地千きゝ芳童子達　淑峨

此所富士山に眺望絶境に傳たり四時共に芙蓉峯を
白雪連山に立て突兀〳〵と眼中為精に容る風
不二の詩歌古今盡し〳〵と以て僅に其一二
を粤に法ふのもの而已

一山高出衆峯巔　炎裡雪氷雲上烟　羅山

大古若同仁者樂　蓬莱何必覓神仙

望嶽

何物芙蓉落日寒　關中霽迥綠雲端　徂徠

青天一柱峥嶸出　白雪千秋突兀看

誰指仙衣懸縹緲　自疑玉女剖琅玕
于今石跡山陰地　嗅取驪駒問大丹

仝

雲臺玉女昔朝天　東指芙蓉帝所旋　南鄙
豈有秦時徐福識　不令漢代少君傳
雪垂閶闔時齊對　日動扶桑曉倒懸
瀛海瑞祥常五色　三峯高標拱羣仙

仝

扶桑第一山　重此對屏顔　蕉中常
白雪初陽映　崚嶒霄漢間　加茂音通
千秋積雪糊行節　鞋底青雲幾萬重

六十余州眼前齊　登臨三國一芙蓉

万葉集　望不盡山歌并短歌　山部宿禰赤人

天地之分時從。神左備乎。高貴寸。駿河有。布士能高嶺乎。天原振放見者。度日之。陰毛隱比。照月乃。光毛不見。白雲母。伊去波代加利。時自久曽。雪者落家留。語告。言継將往。不盡能高嶺者

田兒之浦從。打出而。見者真白衣。不盡能高嶺尓雪波零家留

萬葉集　不盡山歌　長哥有　高橋蟲麿

不盡嶺尓零置雪者六月十五日消者其夜布里家利

拾遺　振神之ゆびの行れいさ〻ゆ　朱へて幽一の山もとゆめ人麿

詞花　日くらし小山陰のさ松ふ時雨し小時の雪ぬ見ける　大江喜言

續後拾　姫しの松八咲けるもの如らひ　於時之〻ぬ山櫻哉　法印隆弁

玉葉
越かけていくつ成里也東路やこの國をさへ不二の高根や　前大僧正道玄

風雅
田子浦ゆしほ干やらむ見わたせは絶間ハふしの煙なりけり　清輔

同
ふしの根は晴行空にあらはれて裾野にのこる白雲の雲　惟宗光吉朝臣

新古今
風になひく冨士の煙の空にきえて行衛もしらぬ我おもひかな　西行法師

古今集
君といへハ見まれ見すまれ不二の根のめつらしけなくもゆる我恋　藤原忠行

同
ふしの根のならぬおもひにもえハもえ神たにけさぬむなし煙を　紀のめのと

同
人しれぬおもひを常にするかなるふしの山こそわか身なりけれ　読人しらす

十六夜日記
誰かたになひきはてゝか冨士の根の煙の末のみえす成らん　阿仏尼

新續古今
限あれはけふしのみ雪も消る日もまたこゆる深山の下柴　順徳院

新新拾
冨士の根ハ雨ハふもとにすきぬれと雲よりうへに見ゆる白雪　守覚法親王

新後拾
時しらぬ山郭公五月まてかくれやふしの根をわかむらん　藤原長秀

月清集
不二の山きゆれハやかてふる雪のひと日も暮す煙なりけり　後京極

家集
焼人もなけれと常に冨士の山雪のしたより煙こそたて　源重之

万代集
日暮るゝ田子の浦はの夕しほを不二のみたけは雲も見えてけり　紫金台寺入道覚性親王

新六帖
聞なれし不二のけふりも絶にけり高根の雪の色に似る哉　前大納言為家

光行紀行
冨士の根の嶺よりよそふ白雲を天津乙女の袖かとそ見る　光行

曙記
谷のかハ峯より落る滝つ瀬のさらにそ向ふ不二の白雪　二条左相府

同
八重霞たちはかくさて帰しの山雪のあけほの見えて桜咲比　烏丸光広

東紀行
麓より高根をかけて晴る日に山も隠さぬふしの雪の秋　冷泉為村

琉球人
人ゆへにあかぬかくさん三保の松原ふしとこそいへ雪の曙　讀谷王子

同
ふしの根の雪は錦に見えて一むらたてる浮島か原

新古今
道すからふしの煙もわかさりき晴るまもなき空のけしきに　右大将頼朝

淡海彦根
心あての空もはるかに霞てふもとまてかすむふしの根　大菅中養父

天津日の照せる方の国中にたくひなしとふ山ハふしの根　伴蒿蹊

元日の光ふ物ゑ　山嵩宗鑑

富士の山ゆ出さるなれはうとうと霞

ふ流ふ雪三百七日八日雪　湖春

燈ふ、燈け消自ー不　兵の雪　信德

目ゑ加ふ時ゆ　江戸能楽祖　德元

三帆舟ハ時風ゑ　さ義

四萬八千丈富士ふ雪ふ　其角

時ふ　ゆ　ゆ　畫ゆ　鏡ふ　ち　後ー　沿　籬島

蓑ー流ふふふの　解ゆ　雪川　冠吾

中ゞ卷終　子湖

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan